

歴史は未来の羅針盤

# 温故知新

今回は、近江日野商人館からお届けします。残り一か月で今年度も終わります。来年度は、商人館が創立三〇周年を迎えます。町民の皆さんに支えられての三〇年。今後とも、日野商人の「お陰様」の心で、全国へ「近江日野」に関する情報発信を続けてまいります。

## 日野商人の町だからこそ

江戸時代以来、日野地方の「お店持ち」や「お店勤め」の人々は全国で高い、多くの現金収入や文化を日野地方にもたらせてきました。そのため、日野地方は田舎に位置するにもかかわらず、経済や文化が繁栄するという特異な地域となっていました。

例えば、明治四三（一九一〇）年の滋賀県下の高額納税者上位二名の中に、半数の一〇名が現日野町の商工業者で占められています。その商工業者の数も、旧日野町域だけで一二九六名（昭和五年）を記録し、活況ぶりを示しています。

それだけに、町の基盤整備や文化・教育施設等の建設も県下の中では一、二を競うほどに進められていました。その具体的な様子を少し見てみましょう。

明治一三年に新築された啓迪学校（現日野小学校）の正面玄関は、

左の写真のように、八角形の木造三階建てという県下で最も斬新な建物で、当時、日野町域では最高層の建物でした。



また、明治三九年には、蒲生郡立図書館「日野文庫」（写真左が双六町にいち早く建設され、郡立とは言え、その建築費用の大半は現日野町域の人々の寄付でまかなわれていました。



日野地方には、江戸時代以来、能楽をたしなむ人が多く、明治の中頃には観風社と清閑社の二団体が組織されており、床下に

反響用の壺を埋め込んだ本格的な能舞台が松尾町（写真下）と

内池村の二か所にあります。

大正二（一九一三）年には、

「日野劇場末広座」（写真左）が河原田町にオープンし、娯楽施設として多くの人に親しまれていました。



教員の給料が町村負担の時代には、県下でも日野地方の教員給料がずば抜けて高く、優秀な人材が集められ

教育設備の充実ぶりも県下有数であったと伝えられています。

大正一二年には、日野高等女学校にスタインウェイ製、翌年には必佐尋常高等小学校にシードマイヤー製（写真右下）という世界的

名器のグランドピアノが、日野商人によって寄贈され、百年近く経過した今もなお美しい音色を奏でています。

明治四二年には、日野地方で七七台もの人力車が登録されていますが、昭和の時代に入ると県下でも珍しいハイヤーが日野の町に登場しています。

昭和初期に日野地方で走っていたのは、フォード二台、シボレー三台（写真左）の外国車と国産のダットサン二台でした。永源寺へ紅葉狩りに行く湖東地方の人々が、わざわざ近江鉄道日野駅経由でハイヤーを利用したとの話も伝えられています。

戦前の日野には、日野商人の町だからこそその繁栄ぶりを示す状況がその他にも数多くあります。

（本文中の絵はがき・写真は町内の方から提供していただきました。）

